

国際婦人デー3・6東京集会に寄せられたメッセージ

ベネズエラ・ボリバル共和国からのメッセージ

医療計画・社会福祉計画におけるベネズエラ女性のリーダーシップ

セイコウ・イシカワ（駐日ベネズエラ大使）

昨年の国際婦人デーから、異例の一年が過ぎました。新型コロナウイルスのパンデミックが世界の隅々までを襲い、各国政府、経済、医療制度、そして社会全体を揺るがしました。その結果、性別、年齢、社会階級、出自、宗教など関係なく、もっとも弱い立場にいる人びとが重大な損害を被りました。

とりわけ米国や西ヨーロッパなどの資本主義国で、多数の感染者・死者が生じました。資本主義の経済システムでは、住民に本当の福祉や社会保障を提供できないことが、改めて明確になりました。

感染拡大がもたらした学びがあります。それは、「命か経済か」という誤った二者択一を前にして、各国の動向、たとえば社会全体でのパンデミック対応、人びとの意識、規律、タイムリーな措置といったものに差異が出たということです。あまり報じられませんが、米国が「一方的強制措置」、いわゆる制裁を手段に実行してきた犯罪的な経済封鎖にもかかわらず、ベネズエラのパンデミック対応は比較的成功しています。わが国の人口当たり感染者数や死者数は南米でもっとも少ないレベルであり、感染拡大にうまく対処してきたと考えられている日本と、ほぼ同水準にあります。

ベネズエラの新型コロナ対策は、チャベス司令官が一九九九年に始めたボリバル主義革命の本質に根ざしています。

革命前は医療の七三%が民間の手にありました。所得の低い患者は治療のため長い列を作らねばならず、時には夜通し待つこともありました。また、診察してくれる医療機関が見つかるまで、病院から病院へ「たらい回し」されることもありました。今では、すべてのベネズエラ国民が、無償でユニバーサルな医療制度を利用することができるようになっています。

医療政策は、革命で創設された他の政策と同じく、「国民主役の参加型民主主義」に基づいています。その例の一つがスラム街の医療委員会で、人口一〇〇〇～二〇〇〇人の共同体において市民ボランティアが形成されています。新型コロナ対応で言えば、かれらボランティアが共同体の医師を補佐し、住民を一軒ずつ訪問して症状のある人を特定したり、予防に向けた啓発活動を支えたりしています。

ベネズエラでは、医療計画を含む社会福祉計画において女性のリーダーシップが欠かせません。日常生活で生じる課題に深く関わっているのが女性であり、その解決を積極的に模索する力があるためです。革命以降、推進されている女性の団体はさまざまあります。たとえば、「Puntos de Encuentro（集まりの場）」は社会福祉計画に関して共同体と政府とのつなぎ役を務める組織で、全国に約一万七七六一か所あります。ほかにも、「女性銀行融資利用者ネットワーク」、そして社会勢力・社会組織、主婦の労働組合、先住民女性のネットワークやアフリカ系女性のネットワーク、障がいを持つ女性のネットワークをまとめる「全国女性連合（UnaMujer）」などがあります。いずれにおいても、ベネズエラ女性らはその立場と要求を明確に示しています。それと同時に、これら組織が新たな社会機構となり、ボリバル主義革命を擁護する意識や政治的アイデンティティの源泉ともなっています。

新型コロナウイルスとの闘いに関する数字は、二〇年超の革命で積み重ねてきた努力の表れであり、社会主義的運営の有効性を示すものです。革命により生まれ、女性が主導する人民運動に基づいた社会福祉計画が、資本主義やパンデミックの影響に対する社会的な免疫の一つとなっています。

すべての闘う女性たち、そして、より平等で公平、かつすべての人にとって条件や機会の平等を備えた社会を支持するすべての男性に向けて、皆声を合わせて、応援と励ましを

送りました！

(『思想運動』 1063号 2021年4月1日号)